

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：82622

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24501276

研究課題名(和文)共和主義におけるピールのミュージアムの教育的役割と視覚による教育の成立

研究課題名(英文) Educational role of Peale's museum and the formation of visual education under Republicanism

研究代表者

横山 佐紀 (YOKOYAMA, Saki)

独立行政法人国立美術館国立西洋美術館・学芸課・主任研究員

研究者番号：70435741

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：1786年、チャールズ・ウィルソン・ピールによってフィラデルフィアに開設されたアメリカ初の公共ミュージアムは、それまでの「驚異の部屋」とは異なり、リンネの分類法を取り入れ、世界の秩序を整理や分類の概念を通じて指し示す啓蒙主義的な展示を行っていた。これはヨーロッパを席捲していたアメリカ退化説に対する反論であり、アメリカの豊かさや広がりや動物のはく製や鉱物、ポートレートを通じて視覚化し、アメリカ市民に伝える役割を果たしていた。この背景には、トマス・ジェファソンとの親交を指摘することができる。両者は、共和主義的教育観を共有していたが、ジェファソンの理神論もまたこの展示に影響を与えている。

研究成果の概要(英文)：The museum which Charles Willson Peale opened in Philadelphia in 1786 was the first public museum in the United States. Unlike preceding Kunstkammer, its display was quite education-oriented by adopting Linneean taxonomy to show the world orders and systems. This idea itself is the fruit of Enlightenment thought in the 18th century, as well as Republican educational philosophy during the founding era. On the other hand, this display was the counterevidence to American degeneracy hypothesis that was led by Buffon and expanded through the continent. Peale's display intended to visualize and indicate American citizens that their land has rich flora and fauna and even prehistoric life like Mastodon used to wander around, so it has never been degenerated. Furthermore, Thomas Jefferson played a key role to Peale's museum by taking the chair of its board and exchanging ideas over the museum based on his Republicanism and Deism, which is again deeply connected to Enlightenment thoughts.

研究分野：博物館学

キーワード：チャールズ・ウィルソン・ピール トマス・ジェファソン 博物館学 展示 アメリカ退化説 理神論
視覚 共和主義

1. 研究開始当初の背景

フランス革命期、コンドルセらによる公教育制度の提案が同時にミュージアムの設立を含んでいたことは、ミュージアムがすぐれて近代的な教育制度のひとつであることを示している。それはまた、革命期の政治思想に影響を受けながら、王侯貴族のコレクションが国民に提供されるべき道徳的、美的教育の資源へと転換されたように、その時々々の社会思想や教育思想と不可分の関係を結んできた。この事実には、ミュージアム教育を議論するにあたって留意すべき二つの論点が含まれている。第一に、ミュージアムにおける教育とは、展示や教育プログラムのみが存在するのでも、そこに初めて表れるのでもなく、教育思想や政治思想との影響関係のもとに捉えられるべきであること、第二に、教科書や文字情報といったいわゆるテキストを介する教育とは異なり、「視覚」を特権化することによって成立する形態の教育であることである。こういった基本的な議論は、ミュージアムにおける教育活動といえばワークショップやギャラリートークといったいわゆる「教育プログラム」のみが即座に想起される現状にあって見落とされがちであり、ミュージアムと教育の関係に対する社会的関心が高まっている現在こそ、ミュージアムにおける教育や価値の伝達が、社会状況といかに関わり構築されてきたのかを問うことが求められている。

日本のミュージアムにおける教育普及活動に事実上大きな影響を与えてきたのは、アメリカのミュージアム・エデュケーションである。過去数十年における AAM (アメリカ博物館協会) の動向研究から、現在の日本の美術館で重視されている「作品をよく見る」という鑑賞方法 (ニューヨーク近代美術館で開発された Visual Thinking Strategy に影響を受けたもの) に至るまで、長年にわたりアメリカのミュージアム・エデュケーションは日本にとっての参照点であり続けてきた。だが実践例や方法論の受容の一方で、ミュージアム・エデュケーション成立の歴史的経緯や思想的背景についての研究は、これまで十分に顧みられてこなかった。日本の学芸員養成課程でも「博物館教育論」が必修科目とされ、教育担当の専門職員へのニーズが高まっている現在、これがアメリカにおいてどのように成立したのか、またその背景にいかなる政治思想、教育思想が存在してきたのかを改めて確認することは、まさに今行われるべき作業であろう。

2. 研究の目的

本研究は、アメリカにおけるミュージアムと教育の関わりを建国期にさかのぼり、アメリカ初の公共ミュージアムを設立したチャールズ・ウィルソン・ピール (Charles Willson Peale, 1741-1827) のミュージアムを取り上げ、その展示が当時の教育思想や政治思想と

いかに関わっているのかを確認しつつ、これらが展示にいかに関与化されていたのかを確認することにある。

画家であり科学者でもあったピールは、1786年、フィラデルフィアにアメリカ初の公共ミュージアムを設立し、その教育的役割を明確に意識した展示やミュージアム運営を行った。その最も基本的な理念は「ミュージアムは、あらゆる人に開かれた学びの場でなければならない」というものである。アメリカのミュージアム史において欠かすことのできない人物であるにも関わらず、彼の業績については日本において部分的に紹介されるにとどまっている。とりわけ一次資料の検討はまだまだ不十分であり、また展示方法やコレクションと彼および建国期の政治思想、教育思想との関係についてはほとんど手つかずの課題として残されている。ピールは、ベンジャミン・フランクリン、ジョージ・ワシントン、トマス・ジェファソンといった建国期アメリカの主要人物たちのサークルに属し、彼らのポートレートを手がけている。中でもトマス・ジェファソンとの関係は彼のミュージアムにとっても非常に重要であったことから、本研究では、ピールのミュージアムの収蔵品、展示方法の検討ばかりではなく、ジェファソンを中心とする同時代の人物たちとの知的交流が彼のミュージアムにおける展示や教育の概念にどのように影響しているのかをも明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、おもに以下の手順によって進められた。

(1) ピール書簡集の検討

本資料は、ナショナル・ポートレート・ギャラリー (ワシントン DC、スミソニアン協会) 内のピール・ペーパー・プロジェクトによって調査研究および編集がなされた資料で、イェール大学出版会より5巻刊行されている。これらの書簡には、家族や知人とのごく日常的なやりとりに加え、ピールの画家、科学者としてのアイディアやミュージアムの教育的役割や理念が書き留められており、ジェファソンとの公私にわたる交流の足跡もここに刻まれている。特にジェファソンとの往復書簡に注目し、これらを洗い出して整理した。

(2) アメリカ哲学協会 (フィラデルフィア) 所蔵資料調査

ピールのミュージアムの所在地がフィラデルフィアであったことから、関連する重要な作品や資料はフィラデルフィアの研究機関および美術館に多く所蔵されている。ベンジャミン・フランクリンによって創設されたアメリカ哲学協会はそのひとつである。ピールのミュージアムは一時、アメリカ哲学協会の建物を間借りするようして開設されていたこともあり、同協会には彼および息子たち

による手稿が収蔵されている。ピール家の末裔であるセラーズ (Charles Coleman Sellers) によるピール研究の基本書、*Mr. Peale's Museum* (Barra Foundation Book, New York, 1980) の執筆にあたり著者が整理したピール関連資料も所蔵されており、これらの文献を調査した。

(3) ペンシルヴェニア歴史協会所蔵資料調査

アメリカ哲学協会所蔵資料調査に加え、フィラデルフィアに関する歴史資料を渉猟するため、ペンシルヴェニア歴史協会でも調査を行った。建国期のポートレート画家としての業績が何よりも知られるピールは、油彩画ばかりでなく人物のシルエット制作も手がけている。同協会では、ピールの手になるシルエットが収められたスクラップブックを発見することができたが、これは市民におけるピール作品 (あるいは視覚的マテリアル) の受容を指し示す資料であると考えられる。この資料制作の経緯についてはいまだ調査中であり、今後引き続き検討が必要である。

(4) 関連ミュージアムにおけるピール作品の調査

ピールのミュージアム内の展示の様子を表した作品およびピールの手になる建国期の政治家などのポートレート作品を、ペンシルヴェニア美術アカデミー、フィラデルフィア美術館、独立国立歴史公園 (以上、フィラデルフィア)、ナショナル・ポートレート・ギャラリー (ワシントン DC)、ニューヨーク歴史協会、メトロポリタン美術館 (ニューヨーク) などにおいて調査した。

(5) 視覚および触覚に関連する文献の渉猟
近代ミュージアムが歩み始めた 18 世紀から 19 世紀初頭は、視覚や触覚をめぐる問題が哲学の領域において注目を集めた時代である。主要な論者であったバークリ、ロック、コンディヤック、デイドロなどの議論をたどると共に、現代における視覚障がい者と視覚をめぐる問題をテーマとした文献を系統的に渉猟した。

4. 研究成果

建国アメリカにおける初の公共ミュージアムと教育思想および政治思想との関係を検討する本研究は、最終的には、トマス・ジェファソンとピールとの思想的交流に焦点を当てることとなった。というのも、ジェファソンとピールの間には、ポートレートのモデルと画家という以上の親交があり、ふたりを取り結んだものこそピールのミュージアムであったからである。ミュージアムをアーナとして両者で共有されていたのが、共和主義的教育観と理神論である。

ジェファソンは建国期共和主義の優れた政治家であり教育にも大きな関心を抱いて

いた。彼の共和主義的教育観はピールと共有され、ミュージアムにも反映されている。加えて、その理神論がピールの展示に影響を与えた可能性が明らかとなった。本研究のおもな成果は以下のとおりである。

(1) ピールのミュージアムにおける新たな共和国の視覚化とアメリカ退化論

ピールがフィラデルフィアにミュージアムを開設したころ、ヨーロッパではアメリカは退化した土地であるとするいわゆる「アメリカ退化論」が博物学の大家ピュフォンらによって盛んに論じられていた。アメリカ退化論とは、アメリカの動物はヨーロッパに比べて種類が少なく、強くも美しくもない、人間についてもアメリカ・インディアンは劣り、旧世界から新世界に移植されたものは動植物、人間を含むすべてが退化する、ヨーロッパ人はアメリカに渡ったとたん、身体的、知的、道徳的に衰退し始めるといったことを科学の装いをもって論じるものである。アメリカには、すぐれた哲学者や学者、芸術家や思想家など一度たりとも現れたことがないとすら考えられていた。

これを深刻に受け止め反論を行ったのがフランクリン、アダムズ、ジェファソンらである。

ジェファソンは、ピールのミュージアムの理事会長を務め、自らのコレクションの一部を寄贈するなど、このミュージアムに対しきわめて重大な貢献をなしている。言い換えるならば、ジェファソン自身が博物学に関する十分な知識を備えていたわけだが、これに基づきジェファソンは『ヴァージニア覚書』においてアメリカの動物について詳細に記述しアメリカ退化論への反論を試みている。そればかりか、アメリカではすべての動物が退化するのではない証拠として、駐仏大使として赴任した際にはヘラジカの皮や骨格標本をアメリカからわざわざ持ち込み、フランス人の眼前に披露したのである。

ジェファソンが深く関わったピールのミュージアムは、アメリカ退化論への反論を視覚化し、市民に示す場であったといつてよい。ピールのミュージアム内部の様子は、自画像である《自らのミュージアムにいる芸術家》(1822 年、ペンシルヴェニア美術アカデミー所蔵) に見ることができる。画面中央でカーテンを持ち上げるピールの背後には、古代生物 (マストドン) の骨格標本の一部がのぞいているが、これは単なる描写に留まるものではない。本作品の水彩による準備素描《ロング・ルーム》(チャールズ・ウィルソンピール、ティティアン・ラムゼイ・ピール、1822 年、デトロイト美術館) をさらに参照すると、鳥類のはく製が壁面に整然と並べられ、鉱物が戸棚のようなケースに整理されて保管され、あるいはネイティブ・アメリカンのモノがやはりケースに収められているその最上段にアメリカの発展に貢献した人々のポー

トレートがずらりと掲げられている様子がわかる。ピール、ジェファソン両者にとってアメリカに巨大な古代生物が存在したことを証明すること、現在においても多種多様な動植物や鉱物が見出されること、さらにすぐれた人物が多く輩出され活躍している事実を示すことは、国土の広がりとその豊かさを、いふなれば「アメリカ」の可能性を視覚化し、市民に提示することを意味した。

ピールのミュージアムは共和主義的な市民教育の場であると同時に、ヨーロッパからの議論に対しアメリカが決して劣った場所ではないことを教育し、同時に自らの市民に対しても若い共和国アメリカを視覚化する場であったと考えられる。このような議論に関する検証の成果は、拙著『ナショナル・ポートレート・ギャラリー』にまとめられた。

(2) ジェファソンの理神論とピールのミュージアム

ジェファソンは、共和主義者である一方で、理神論者でもあった。理神論 (Deism) とは「創造者としての神の存在は認めるが世界の支配者としては認めない」というもので、啓蒙主義思想の産物である。たとえば聖書の記述について、理性で理解できない事柄 (奇跡や啓示) は認められないとするのがこの立場である。

ピールもまた基本的に理神論の人であった。宗教的熱狂に距離を取り、キリスト教の教えに熱心ではなかったことに加え、そもそもリンネの分類法を自らのミュージアムの博物学展示に採用すること自体が、世界の成り立ちを神から解放する思考の表れであろう (進化論を経た現在、多少奇異に映る分類や考察が含まれるとしても)。同時に、彼は宗教関係者たちの因習深さについてもよく認識しており、息子たちに宛てた書簡の中で、自らのミュージアムに対し宗教関係者が何がしかを申し立てるかもしれないから、彼らには注意をするようにと忠告している。ただし、彼自身がどの程度理神論に親しんでいたのかは今後まだ検討の余地がある。そこで、本研究においてはジェファソン自身の理神論をたどることをまずは目標とし、ジェファソンの理神論の粋とでもいふべき私家版聖書『ナザレのイエスの生涯と道徳 ギリシャ語、ラテン語、フランス語、英語の福音書からの抜粋 *The Life and Moral of Jesus of Nazareth, Extracted Textually from the Gospels in Greek, Latin, French and English*』(以下、『ナザレのイエス』) の日本語版の制作とその分析を行った。

『ナザレのイエス』は、ギリシャ語、ラテン語、フランス語、英語の四福音書からジェファソンが「理性によってのみ認められる」記述を切り取り、福音書を横断して各言語の同じ箇所を並置しながらひとつの読み物にまとめたものである。宗教は厳密に個人の問題であると考えていたジェファソンは、家族

にすら自身の信仰を口にすることはほとんどなく、この聖書も彼自身のためだけに作られ、死後長い間、ごく限られた人にしか存在が知られていなかった。本書やジェファソンの理神論に関する研究はすでに充分蓄積されているが、本書の日本語版はまだ存在しない。そこで本研究では、日本語版聖書 (新共同訳聖書) を切り抜くというジェファソンと同様の方法を取って日本語版を制作し、その上で、本来の聖書の記述から取り除かれているもの (理性によって認められないとしてジェファソンが排除した記述) を取り上げ一覧表にまとめて分析した。その結果、天使、奇跡、癒し、復活、預言といった要素が、ごくわずかな記述であっても徹底して排除されていること、その一方で内容が重複する記述が 19 か所に認められることが改めて明らかとなった。ジェファソンの理神論とピールの関係、および日本語版聖書とその分析については『共和主義におけるピールのミュージアムの教育的役割と視覚による教育の成立』(インターパブリカ、2015年)にまとめられた。

ただし、すでに述べたように、ジェファソンのこの徹底した思想がピールといかほどまでに共有されていたのかは今後の検討課題であり、また、理神論に基づいてジェファソンが設立したヴァージニア大学の組織のひとつに自らの博物館博物学を組み込むようピールがたびたび要請していたにも関わらず、ジェファソンがついにそれを認めなかったことなど、両者の間で「ミュージアムをめぐって共有され得なかったこと」についての議論も必要である。これらは今後の課題として引き続き検討したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

横山 佐紀「『ことばによる記述のためのガイドライン』 視覚に障がいがある人との美術作品鑑賞のために」立教大学 学校・社会教育講座『ムゼイオン 立教大学博物館研究』、査読無、No.60、2015、20-29頁。

横山 佐紀「ニューヨークのさまざまなミュージアムとアクセス・プログラム」日本博物館協会『博物館研究』、査読無、Vol.48、No.1、2013、21-23頁。

[学会発表](計5件)

横山 佐紀「ミュージアムにおける身体
—視覚と触覚をめぐって—」日本比較教
育学会第 50 回大会、2014（名古屋大学）

横山 佐紀「ミュージアムの空間構成と
教育プログラム 歴史展示の装置として
」日本比較教育学会第 49 回大会、2013
（上智大学）

横山 佐紀「ポートレートによる国家の
歴史：ナショナル・ポートレート・ギャ
ラリーの諸問題」表象文化論学会第 8 回
大会、2013（関西大学）パネル「ミュ
ージアムの世界としてのアメリカ」

横山 佐紀「ナショナル・ポートレート・
ギャラリーにおける思想・歴史」文化資
源学会第 2 回博士号取得者研究発表会、
2012（東京大学）

横山 佐紀「チャールズ・ウィルソン・
ピールのミュージアムとアメリカ」アメ
リカ学会第 46 回年次大会文化・芸術史分
科会、2012（名古屋大学）

〔図書〕（計 2 件）

横山 佐紀、インターパブリカ、『共和主
義におけるピールのミュージアムの教育
的役割と視覚による教育の成立』、2015、
84 頁。

横山 佐紀、三元社、『ナショナル・ポ
ートレート・ギャラリー その思想と歴史』、
2013、422 頁。

〔産業財産権〕

出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

横山 佐紀（YOKOYAMA, Saki）
国立西洋美術館・学芸課・主任研究員

研究者番号：70435741

(2) 研究分担者

（ ）

研究者番号：

(3) 連携研究者

（ ）

研究者番号：